



名こそ惜しけれ

Sense Of Shame

永田円了

ドナルド・トランプ氏が45代米国大統領に就任した。宣誓式ではトランプさんの左手は聖書にのせられている。たとえこの方が内心何を思おうとも、米国の道徳の基盤は聖書にあり、とアメリカ国民に確認をもとめる場面でもある。これは、善悪を裁く裁判のシーンでも見られる。証人は「神に誓って真実のみを述べることを誓います」と発声し、手は大統領と同じく聖書にのせられている。

さて、日本ではどうか。新渡戸稲造がドイツに留学中、ベルギーの法学者に尋ねられた。「欧米ではキリスト教を基盤にする道徳教育がなされているが、日本は宗教教育がないのに、どうやって道徳教育をしているのか」。この問いに新渡戸は言葉を失ったという。日本の道徳の基盤は、と考え尽くした結果、英語版「武士道」が執筆されたのであった。

司馬遼太郎のいう「この国のかたち」

学生時代、司馬遼太郎の講演を直接富山で聴いた。白髪の穏やかな表情から紡ぎ出されるコトバが、あたかも7色の絵の具を使ったかのように絵を描く。その絵の精密さ、豊かさ、立体感はいまなお心に残る。晩年司馬が私たちに残したコトバがある。「今後日本は世界に対して、いろいろなアクションを起こしたり、リアクションを受けたりすることになる。そのとき、“名こそ惜しけれ”とさえ思えばよい。世界のキリスト教的倫理体系に、この一言で対抗できる」。



恥ずかしいことをするな。名を汚すようなことはするな。常に自己を律することで、はじめて他を大切にすることができる。明治の政治主導による資本主義が形をなしたものは、当時の役人達が汚職をしなかったから、と司馬は言う。彼らは痛々しいほどに清潔だった。大相撲横綱に昇進した稀勢の里、その就任口上で「横綱の名に恥じぬよう精進いたします」と発声した。この高い倫理観はどこからきたものなのか。

“名こそ惜しけれ”の源流を、司馬は武士の精神の中にみた。吹雪の寒い夜、貧しい板東武士の家に、突然旅人がくる。暖をとるために大切にしていた盆栽を切り、旅人のために暖をとらせた物語。行動の基盤が損得勘定ではなく、名誉を重んじ、美しく生きる武士の規範が濃縮された能「鉢木」を司馬はこよなく愛したという。

禅的資本主義

資本主義の未来は、人に本当に幸せをもたらしてくれるのか。いま“禅的資本主義”に注目すべしと、モーガンスタンレー投資ストラテジスト・ルチア・シャルマ氏はいう。考え方が物から人へ、人間の精神性を重視した資本主義のモデルにその将来をみているのである。

また従来のゴール指向型欲望資本主義から、心を重んじ、人にやさしい“公益資本主義”にシフトすべきと、実業家・原丈人氏も述べている(BS1「欲望の資本主義」)。会社は誰のものなのか。会社は株主のものか。いいや違うであろう。会社は、社員、仕入れ先、地域社会、顧客、地球のために存在するものであろう。そしてその利益は、全ての人々に還元していく。そうしないなら、恥ずかしく感じる“名こそ惜しけれ”を実践できるサムライ経営者こそが、これからの資本主義社会を牽引してゆく存在になろう。

<事例 DVD>

映画「石櫓坂の仇討」／形は変われど武士の精神は、
新渡戸稲造／日本人の道徳観を問われ、コトバを失う
司馬遼太郎／日本人とは、／板東武士の精神
稀勢の里／横綱の名に恥じぬよう、精進いたします
こころの時代／カール・ベッカー氏、日本文化が羨ましい
明治時代、欧米人から見た日本の農村風景、子育て、
磯田道史著「無私の日本人」／映画「殿、利息でござる」
禅的資本主義／BS1「欲望の資本主義2017」
資本主義の未来／会社は誰のもの？
歌・バイオリン／川井郁子・錦織 健

円了のホームページ：www.enryo.jp

